

韓国の高等学校外国語教科書における海外イメージの比較考察

A Comparative Study of the Different Views of Foreign Countries in the Korean High School Language Text Books

飯 田 史 也

(第4部教科)

(平成5年9月10日受理)

はじめに

かつて筆者は、韓国の高等学校の日本語教科書の中の日本イメージについて調査・考察した¹⁾。韓国の学校教科書における日本記述に関しては、それまでも「歴史」や「地理」の教科については日本側からも調査・研究がなされていたが、韓国の高等学校第二外国語である「日本語」の教科についてはまだあまり調査がなされていなかった。そこで前回の調査では、韓国の高校生が、学校教育のなかで日本についての知識やイメージを習得する場合に、日本語の授業における理解も重要であるとの視点に立ち、各社の日本語教科書の内容を調査・考察したのである。

その後その成果を異文化間教育学会13回大会で発表したところ²⁾、多くの学会員から、韓国の高等学校で教授される他の外国語教科書の中の海外イメージはどうなっているのかを調査し、それとこの日本イメージとを比較考察してみたいかどうかという示唆をいただいた。たしかに他の外国語教科書の記述を調査し、日本語教科書と比較することにより、その日本記述の特徴を浮き彫りにすることができるし、また各国と各様な外交関係を持っている韓国が、政府の検定済み教科書によって、自国の高校生たちにどのような外国イメージを持たせようとしているかを知ることができる。それはまた、中等教育での外国語教育において、「英語」履修者がほとんどの割合を占める日本の現状を見つめ直す意味においても興味深い。教科書がその影響力においても、発行部数においてもきわめて強力な情報メディアであるということも考慮するならば、高校生の海外イメージが、教科書をもとにして形成されてゆくことは言をまたない。

そこで本稿では、このたび入手した、日本語以外の韓国高等学校外国語教科書の内容を調査・考察し、かつて調査した日本語教科書の中の日本記

述の内容と比較考察したい。韓国の高等学校では、現在、英・独・仏・西・中・日の6言語が教授されているが³⁾、今回調査するのは、韓国の高等学校第一外国語である英語と、第二外国語教科のうち、ヨーロッパの言語であるフランス語と、アジアの言語であり韓国の外交関係からその内容の注目される中国語の、3種の外国語教科書についてである。なお今回調査するのはすべて、1989年8月19日付けで韓国教育部の検定印を受けたものである。

I 教科書に掲載された写真

学校教科書に掲載された外国の写真は、児童・生徒に、その国についての具体的な視覚イメージを形成させるという点で、きわめて重要なものである。また一方で、教科書を開くたびに同じ写真を眼にすることから、生徒にその国に対する一定のステレオタイプを形成させてしまうおそれもある。前回の日本語教科書調査では、韓国の教科書に掲載された「日本の写真」を検証し、韓国人が日本の何を「日本的なもの」と考えるのかを考察した。だがその日本像は、現在の日本人自身が、一般に「日本的なもの」と考える日本像とは若干異なったものであった。今回は、英・仏・中のいくつかの教科書の写真を検証し、日本語教科書の写真と比較検証したい。

1. 中国語教科書の写真

今回検証する各教科書が検定を受けたのは1989年であり、このとき韓国は、台湾や香港に対しては友好関係があったが、中華人民共和国とは正式な国交はなかった。このため韓国の教科書を検証する場合、韓国の外交上の立場から、中国語の教科書に、どの地域のどのような写真が掲載されているかを知ることがきわめて興味深いことである。

寺山出版社の教科書では、表紙裏に中国大陸、



台湾、台北駅前の繁華街の光景

(舎心出版社、中国語上)



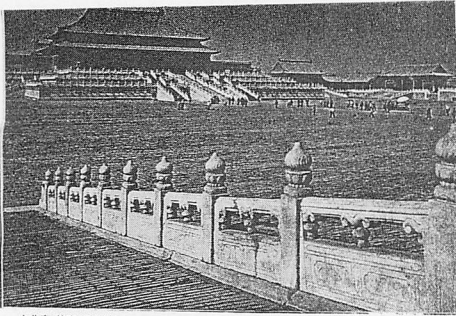
▲ 天安門広場(北京)

壁のスローガンと、毛沢東の肖像画が
消去された天安門広場の写真
(富民文化社、中国語上)

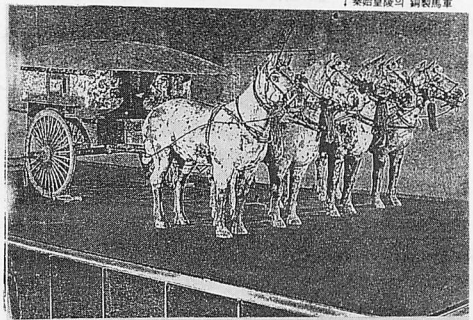
中華人民共和国の写真

各社教科書とも重点的に歴史的、
伝統的文物の写真を配している。

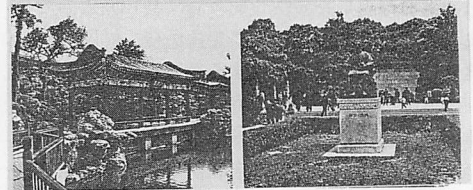
(舎心出版社、中国語上) →



↑ 北京 故宮(紫禁城)



↑ 秦始皇陵の 銅製馬車



▲ 獅子林(元)

▲ 魯迅墓(上海虹口公園)

(富民文化社、中国語下)



龍門石窟(洛陽)

(盡命出版社、中国語下)



▲ 春節高曉盛會

<写真1>中国語教科書に掲載された写真

裏表紙裏に台湾島の地図が掲載されており、大陸の地図には「中国政区」、台湾島には「中華民国」の名称が記入されている。

どの教科書の巻頭グラビア写真にも、中国本土の風景が多く使われている。だがそのほとんどは、万里の長城、洛陽の龍門石窟、紫禁城太和殿（故宮博物院）、兵馬俑坑、洞庭湖畔の岳陽楼、拉薩（ラサ）の布達拉宮、上海海関鐘樓などの歴史的遺構や、土器や甲骨文字等の考古学的資料、各時代の陶器等の工芸品、京劇や中国少数民族の舞踊の一場面など、歴史的・伝統的なものに偏っているらしいがある。これは、日本語教科書に掲載された写真に、日本の現在の写真が多く盛り込まれていたことと対照的である。富民文化社の上巻には、現在の中華人民共和国の風景として唯一、大極拳をすする中国の老人たちの写真と、現在の天安門広場に集う人々の写真が掲載されている。だが天安門広場の写真については、本来ならば広場正面天安門の壁面左右に書かれている「中華人民共和國万歳」・「世界人民大団結万歳」の文字と、中央に掲げられている毛沢東の肖像画とが修正されて消去されている。

一方、各社の教科書において、台湾の写真については陽明山公園にある伝統的な建造物の写真とともに、現在の台北駅近くの繁華街の光景が掲載されているなど、このような偏りは見られない。

中華人民共和国に関する写真が歴史的なものに偏り、また写真に上記のような修正が施されるのは、現在の韓国の中華人民共和国と台湾との微妙な外交関係や、韓国の掲げる「反共主義」という国是が、教科書に反映したためだと考えられる。韓国にとって1949年以降の中華人民共和国の写真の掲載にはかなりの配慮が必要であるが、近現代以前の歴史的・伝統的風物の写真であれば、それは台湾や香港などの中国文化圏全体が歴史的に共有するものであるから、韓国の学校教科書には掲載しやすいのである。

2. フランス語教科書の写真

フランス語教科書については、ノートルダム寺院、ルーヴル城、エッフェル塔、凱旋門、ヴェルサイユ宮殿、サクレクール寺院、等の歴史的建造物、祭りにおける民族舞踊などの伝統的行事のほか、パリの大道芸人や、パリのカフェで憩う人々、オペラ通りを行き交う人々、シャンパーニュ地方の葡萄の摘み取り風景などの写真が掲載されている。

どの教科書の写真も、基本的にパリを中心とし

たものであるが、ロワール河沿岸の古城や、シャモニーなどの山岳地域、プロヴァンス地方の古代ローマ遺跡、シャンパーニュ地方の農村風景など地方の写真もいくつか掲載されている。ただしこれらの写真も遠景のものが多く、このためフランス観光ポスター的なものになっており、生活する一般市民の姿が見えてきにくいという憾みがある。また、人々の服装などの風俗から、1980年代前半ないしはそれ以前のものとして推測される写真が多いが、このことは、かつて検証した日本語教科書にも見られる傾向であった。

教科書の写真は、本文中の単元内容とは必ずしも関連せず、写真の説明も最小限に抑えられているため、その建造物等がフランスのどこにあり、また歴史的にどういういわれのものなのか教科書からだけでは理解しにくい。このため教科書の写真については、クラスの中で教授者が解説する必要がある。

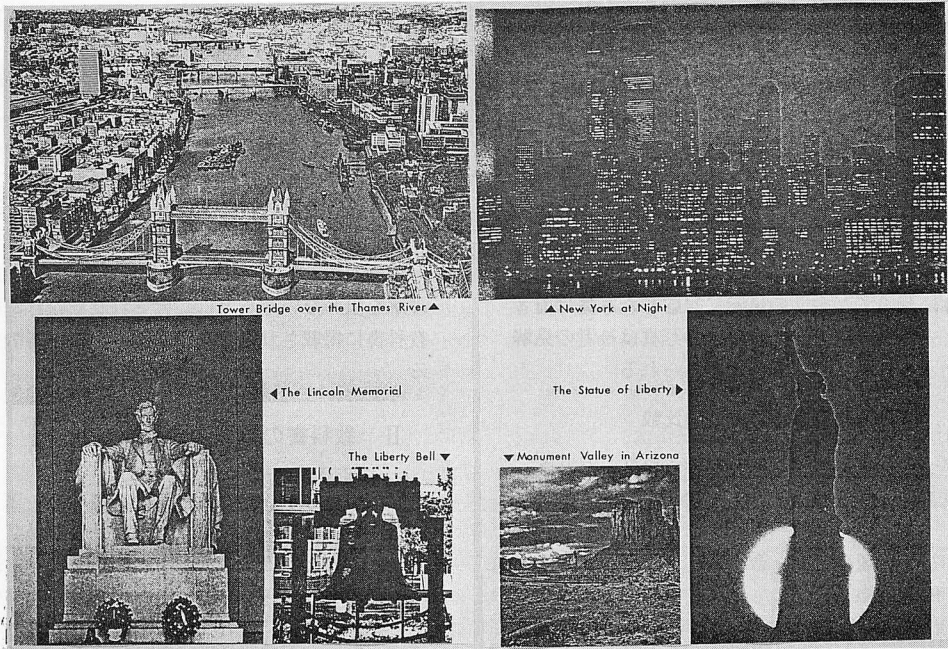
乙西文化社の教科書の表紙には、1988年のソウルオリンピック開会式における、フランスの民族舞踊の写真が使われており、他の類例を見ない韓仏関係を意識した写真となっている。どの教科書にも、フランス語圏である北アフリカ、カナダ、ベルギー、スイスの写真は掲載されていない。

3. 英語教科書の写真

英語教科書は、大きく、イギリスやアメリカ合衆国などの、英語圏の国の写真を載せたものと、それにはこだわらず、本文中に単元テーマに対応させた写真を掲載したものとに分類される。後者には例えば、教學社のものなどがあるが、これは本文中の「What We Hear in Music」という単元に対応して、見開き2ページに、ベートーベンの肖像画、古代エジプトの楽器の描かれた壁画、弦楽四重奏、ミャンマーの堅琴の演奏風景、中東の民族楽器、スコットランドのバグパイプなどの写真を配したものである。

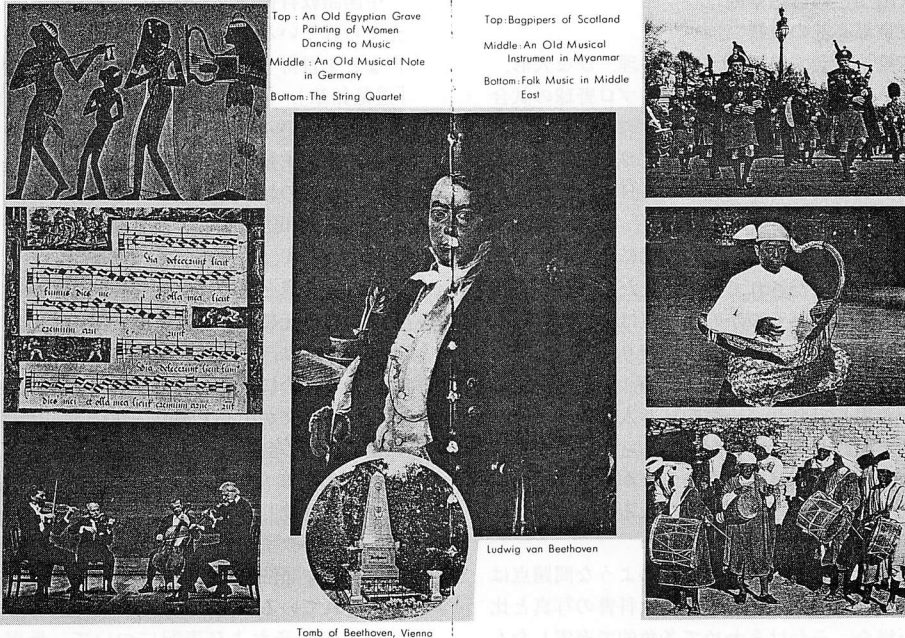
海外移住地などに少しの例外はあるが、日本語は、第一言語としては基本的には日本国内でしか使用されないことばである。フランス語は、北アフリカなどの旧植民地でも公用語として使用される言語であるし、オック諸語等の国内の少数言語（地域語）の存在を無視することはできないものの、フランス語とフランス文化圏とは密接に結びついている。また中国語の場合も、その使用範囲が、中華人民共和国、台湾、香港等に政治的に分割されているし、また世界各地の在外華僑を含めるとその使用範囲は非常に広くなるとはいえ、中

〈写真3〉英語教科書に掲載された写真



イギリスやアメリカの風景を撮ったもの (志学社、High School English II B)

The Music World



本文中の単元内容に関連する写真を載せたもの (教学社、High School English IIA)

国文化圏では基本的に中国語が話されると考えてよい⁴⁾。したがって日・仏・中3言語の特徴は、言語圏に文化圏がほぼ重なっていることだといえる。ところが英語の場合は、その使用される範囲がきわめて多地域に及び、また英語はいわば世界の公用語としての役割も持っているため、英語を習得させることを、英米文化圏を理解させることと切り離しても構わない。あるいはまた、狭義の英語文化圏を、例えばイギリスやアメリカ合衆国、オーストラリア、ニュージーランドなどの地域に限って教授することも可能である。韓国の英語教科書において、本文の単元に対応した写真は前者の、またアメリカやイギリスの写真は後者の見解に立って掲載されたものと考えられる。

4. 日本語教科書の写真との比較

かつて、韓国の日本語教科書を検証したとき、掲載されている写真は大きく次のように分類できた。

- (1) 神社仏閣や城廓、合掌造りの農家などの伝統的建造物
- (2) 法隆寺百済観音像や、日韓双方の弥勒菩薩半跏思惟像など古代からの日韓関係の歴史的遺物
- (3) 各地の祭りや七五三、結婚式、葬礼等の伝統行事
- (4) 火山などの自然景観
- (5) 東京都心部の景観
- (6) 花見、茶会、田植え、懐石料理、ひな人形、こいのぼり、鍋を囲む家族、プロ野球の試合などの生活慣習や風俗
- (7) 修学旅行で慶州市の史蹟や、ソウルのオリンピックスタジアムを見学する日本の高校生の姿

このように日本語教科書の写真には、様々な日本の風物が写しだされていた。ただし、日本語教科書の写真にもいくつかの問題点はあった。例えば写真に写っている日本人が、祭りなどの伝統的行事の場におけるものが多いため、多くの人物が和服を着用しており、一般の日本人にとっての非日常的場面におけるいでたちであった。つまり日本語教科書では、日本の風物のなかでも比較的伝統色の強い事物の写真が掲載される傾向が見られたのである⁵⁾。

日本語教科書の写真には、このような問題点はあったものの、とくに中・仏の教科書の写真と比較した場合、それはきわめて多角的で充実したものであったことがわかる。例えば日本語教科書の

写真には一般的な日本人の生活風景が写しだされているし、韓国の高校生が自身と同世代の日本人の姿を知ることができる、日本の高校生の写真も多く掲載されていたが、中・仏の教科書ではそのような写真はほとんど見られない。中・仏の教科書の写真は、それぞれの国の実態を理解するためのものとしては、表層的で一面的なものであるように思われる。また英語教科書の写真については、英語という教科の持つ特性から、英米文化を理解させるための写真と、たんに本文中の単元のテーマに関連させるだけで、とくには特定の国の文化理解を狙わない写真とに二分された。これが英語教科書に掲載された写真の、最も大きな特徴である。

II 教科書の単元内容

韓国の高等学校第二外国語教科書は上・下（中国語、日本語）A・B（ヨーロッパ系言語）2冊に分かれている。上・Aの教科書ではいずれも基礎的な基本構文が中心であり、それぞれの海外イメージが本格的に表れてくるのは下・Bの教科書からである。

1. 中国語教科書の単元内容

(1) 中国語そのものをめくる単元

中国語教科書は、上巻のはじめが発音の解説に充てられている。ここで基本的な韻母や声母、四声などを習得するようになっている。その後は、「這是鉛筆」、「那是椅子」、「我是学生」、「你是幾年級？」といった簡略な表現を学習していくが、主語＋動詞＋補語という基礎的な構文から入るのは、各社どの教科書においても同様である。また、中華人民共和国で1964年から使用されている簡体字は使われず、すべて旧来の字体である。例文が本格的な文章となる下巻からは、一つの話題がいくつかの単元にわたって展開する。うち、盡命出版社のものは、Aという登場人物が、かつての恩師に会うために香港を訪れるという話である。単元は、会話文が中心であり、ホテル、デパート、郵便局等での会話と、電話による会話とが載せられている。また第5課から第8課までは「談詞彙」、「談量彙」、「談外來語」という名称が充てられ、学校の教室における教師と学生たちが、中国語の語彙や語法について論議を交わすその会話に掲載されている。このうち「外來語」については、ソウルの発音および表記について、世界の他の国々が「Seoul」と発音する中で、唯一中国だけが

「漢城」と表記・発音することが指摘される。単元の中で、教師はこのことについて学生から質問を受け、

世界の他の国々の人が「ソウル」と発音する中で、ただ中国人だけが「漢城」と発音していると、誤解を生じる恐れがある。
(全世界人都叫「Seoul」, 只有中國人叫「漢城」, 我看, 這個可能會引起誤解。)
(和訳引用者, 以下同じ。なお引用にあたっては、教科書に掲載された字体をそのまま用いる。)

と回答する。さらに、

今年ソウルでオリンピックがあるから、この機会に中国人には「漢城」とは発音せずに、「ソウル」と発音してもらいたい。
(所以, 我想啊, 今年在「Seoul」舉行奧運會, 趁這個機會, 我們希望中國人不再叫「漢城」, 就叫「Seoul」。)

と提案する。そして、「漢城」に代わる中国語として「瑟維爾」という表記を紹介する。また教師は、ソウルオリンピックのイメージキャラクターである「ホドリ」について、「虎童児」という表記を黒板に示す。「ホドリ」は虎の子どもをイメージしたキャラクターであることから、表音上のみならず表意上でも整合性があることに学生たちは納得する。他方、法文社下巻の「漢城奧運會」という単元のように、ソウルを、旧来どおり「漢城」と示しているものもある。

また、同じく法文社の下巻では、始めの数単元が「中国文字」、「字和詞」、「実詞」、「虚詞」、「句詞」等の説明に充てられており、単元内容が中国語の説明になっている。このように、単元の文章それ自体をその言語の解説に充てる方法は、日本語教科書においても多く採られていた方法である。

(2) 「中華人民共和国」と「台湾」をめぐる扱い

先述のように、「中華人民共和国」と「台湾」をめぐることは、韓国の教科書はかなりの配慮をなしている。

各教科書の会話文を中心とした単元では、学習者と等身大の、韓国人生徒という登場人物が多く登場する。そして、これらの登場人物が旅行で訪れた人々との交流を持つのは、香港や台北市という設定になっている。これは1989年当時、韓国の高校生が、実際に交流を持てたのが、台湾や香港在住者であったという現実をふまえたものである。他方、中国本土に関する記述は、おもに説明文の単元で行われる。その内容は、中国の歴史や

文化、中国の地理や気候、伝統行事などに関するものである。

盡命出版社の単元「中國的歷史和文化」(中国の歴史と文化)では、数千年来の中国の歴史が述べられたあと、

中國自從一九五〇年至一九八〇年初, 差不多將近三十多年間倒推了歷史的車輪, 被社會主義迷信迷住了, 執迷不悟, 蒙在鼓裏, 造成人為的災難, 可謂中國現代史上經歷過一番空前絕後的浩劫, 中國大陸幾乎變成一片荒地, 落後得不像樣子, 以致中國人民在水深火熱之中煎熬了生活。
(中略)

但是, 幸虧八十年代以後, 中國政府醒悟了社會主義迷信, 擺脫社會主義路線, 宣佈開放政策, 實行一國二制的經濟體系, 力圖挽回中國早年的老大哥的地位。(後略)

(下線引用者, 以下同じ)

と記される。前半の下線部で、1950年から1980年にかけての社会主義政策の批判がなされているのは、韓国の国是からみれば必然的なことであるが、その表現は痛烈なものである。また一方で、後半部分で1980年代以降の開放政策を評価し、大国としての地位を挽回することを歓迎していることも注目される。

一方、これと同じ教科書ではないが、法文社の「雙十節」という単元では、台湾での政治的記念式典の様子が記述される。

十月十日是中華民國的國慶紀念日, 他叫作「雙十節」。中華民國國父孫文先生領導革命, 存國曆十月十日, 在湖北武昌起義成功, 推翻滿清政府, 建立了亞洲第一個民主國。從此以後, 每年十月十日, 全國各界都以歡欣鼓舞的心情來慶祝這個佳節。

この後、記念パレードや、祝祭行事での人々の様子が、美しく表現される。「雙十節」(国慶記念日)は、現在の政治的なイベントであるが、それがこのように賞賛的に記述されるところに、1989年当時の韓国の台湾に対する姿勢が如実に表われている。現在の韓国の高等学校で、この単元がどのように教授されているのか興味深い。

さらに近年の大陸の状況については、盡命出版社下巻の単元「中國的地理」に述べられている。これは中国大陸の全体的な地理を、揚子江、黄河の2大河川と、上海、北京の2大都市を中心に述べたものである。この単元においても、

最近, 中國實行開放政策以後, 大陸的情景日見變化。我們準知道中國不久就要變成一個富強的自由民主國家, 因為中國人民最愛好自由, 和

平, 又肯吃苦耐勞。

と、「開放政策」を歓迎する記述が見られる。

(3) 著名人の著作を出典とする単元

各教科書下巻の後半部には、著名人の著作の一部を抜粋・要約したものがある。これには李白、杜甫、陶淵明らの詩歌のほか、魯迅、胡適、孫文らの小説や随筆が掲載されている。このうち魯迅の作品からの引用には、『故郷』の冒頭部分、『一件小事』等があるが、『故郷』からの引用部分は、20年ぶりに帰郷した作者の、複雑な心情が吐露されているところであり、生徒にかなりのレベルの中国語力がなければ、正確な読解は難しいと思われる。『一件小事』の内容は、ある日魯迅の乗った人力車が老女に接触し、魯迅はそれをいわゆる「当たり屋」だと考えるが、車夫はその老女を助け、巡警分駐所(派出所)に同行する。そしてその出来事が、その後の魯迅の内省のきっかけとなったというエピソードである。この作品は長幼の序を重んじ、老人に礼を尽くすという、儒教的倫理観にも適合するところがあるため、韓国の高校生には受け入れられやすい内容だと考えられる。

また孫文の『立志做大事』が、法文社、富民文化社のものなどに掲載されている。これは若者が志を立て、学問を修めることの重要性を説いたものであることから、高校生向けの内容であるといえよう。また孫文の著作を引用するところにもまた、台湾にバイアスした教科書編纂の姿勢がうかがえる。

2. フランス語教科書の単元内容

フランス語教科書については、若干の相違はあるものの、どの教科書でも、基本的な文法表現は、おおむね同じ内容が同じような順序で出現する。つまりいずれの教科書においても、始めの何単元かで、発音とアクセント記号、日常のあいさつ会話、être 動詞 avoir 動詞 Voici, Voilà, Il y a といった存在表現 un, une, des, le, la, les といった冠詞の数・性に関する項目が出現し、最も基本的な文法事項が習得できるようになっている。またどの教科書においても各単元は基本的に「例文」、「構文と文法事項の説明」、「練習問題」の3つにカテゴリー化されている。教科書上巻(A)では、各単元当たりおおむね100~200語からなる例文が掲載されており、簡易な文章のなかで、いくつかの基本的な動詞の活用や、基本的な構文を習得してゆくような配列がなされている。なお教科書で習得する単語は、各社教科書とも若干の固有名詞と派生語を含めて、上巻(A)でおよそ640語、下巻

(B)で500語前後である。

各社のフランス語の教科書では、中国語や日本語の教科書ほどには、韓仏の相互関係について考察させるための単元は少ない。これは、現在の韓仏両国間の政治的な関係が安定しており、また過去においても、紛争などのなかったことによるところが大きいと思われる。

各社教科書各単元のうち、フランスが登場するものでは、カルチュラタン、モンパルナス駅、ルーヴル宮、ヴェルサイユ宮などパリを中心とした場所を舞台にして、会話文やその場所についての説明文などが掲載されている。

文化社の『Le Français B』には、韓国人とフランス人とが、パリとソウルについて語りあう会話が載せられている。ここでは、セヌ河と漢江、シテ島と汝矣島が比較され、パリとソウルとが地勢的に似ていることについて会話が交わされる。またカルチュラタンについて、その名称の由来が語られ、ラテン語と他の言語との関係が、漢字とハングルとの関係と対照して語られる。しかしこの単元も、形式的な会話の域を脱してはならず、韓仏の相互関係について理解を深めるためのものではない。また、三和出版社の『Le Français B』では、ソウルを訪れたフランス人ルグランが、韓国人の金と会話をなす場面がある。ここでルグランは、ソウルの Jardin Secret (秘苑), Palais Tôksu (徳寿宮), Musée National (国立博物館) を訪問した印象を、金に述べている。しかし、ルグランの印象表明は、

(秘苑では)

まるで妖精の世界に入り込んだようだった
je me sentais comme transporté dans un
monde féérique

(国立博物館で何が一番印象に残ったかと聞かれて)

どれもがすばらしくて、とくにどれとは言いに
くいが、高麗の壺と金の王冠だろうか

Difficile de le dire, car tout est merveilleux.

Petu-être, les vases de koryo et couronnes d'or.
程度のものであり、それ以上の会話は展開しない。前回調査した日本語教科書(進門出版社『高等学校日本語』下)では、韓国を訪れている日本人「幸子」が、安重根義士記念館(안중근의사기념관)と独立記念館(독립기념관)とを見学する場面が描かれていた。安重根記念館から出てきた幸子は、韓国人の友人たちに「わたし、ショックでした」と表明していた。会話はそれにとどまらず、その友人たちとの間に、過去の日韓関係や、高校

生たちの若い世代がこれからの日韓関係をどう築いて行くべきかということについて話が展開していった。安重根記念館と独立記念館は、ルグランが訪ねた秘苑や国立博物館とはきわめて性質の異なる博物館であり、ふたつの単元を同列に比較することはできないが、ひとつのエピソードから、生徒たちに歴史や社会情勢についても考えさせるといった単元構成は、フランス語教科書には見られないようである。

各社教科書のほとんどの単元は、フランスの風物についての説明文であったり、会話文もフランスが舞台であったり、韓国などが舞台であっても会話場面にフランス人が出ていたりするが、乙酉文化社のフランス語Bには、韓国語の語源や歴史に関する説明文が掲載されており、この単元ではフランスやフランス人に関する単語は皆無である。この単元は、日本語が語彙、文構成、発音の点で韓国語にきわめて類似していることをあげ、双方の言語が北方系言語を起源とするものであり、朝鮮半島を経て日本へ着いたのが日本語であると説き起こす。さらに、韓国語がウラルアルタイ語属であると結論付ける。この単元では、ウラルアルタイ語属 (la famille ouralo-altaïque), トルコ語 (turc), モンゴル語 (mongol), ツングース語 (tougouse) など言語学上の専門用語が頻出しており、他の単元とは類を異にするものとなっている。これは、韓国の文化や事情を外国語で考察し、また外国語で説明する能力を養うための単元であり、日本語教科書では「平和のオリンピック」, 「韓国経済のビジョン」, 「韓国の経済」などの単元として、各社の教科書に多く見られたものである。

3. 英語教科書の単元内容

言語の学習を通じて、韓国と、当該言語使用国との相互関係について理解させるための単元は、英語教科書ではさらに少なくなる。前述したように、韓国の英語教科書の場合、英語によって英米の文化を理解させるというよりも、国際語としての英語を用いることで、世界のあらゆる事象について理解させるという狙いが強いために、こうした傾向が現われている。このうち東亜出版社の「High School English I」には、済州島に住む韓国人高校生ヨンホ (Yong-ho) が、ハワイに住むペンパルの高校生スーザンと手紙のやりとりをするという単元がある。手紙のやりとりのなかで、二人は自身の居住する島の紹介をし、それぞれの情報を交換し合い、ハワイと済州島とがともに火山

によって生成したことや、観光の島であることで、互いによく似かよっていることを確認し合う。この点、先にフランス語教科書でみたパリとソウルとを比較する単元とも類似した単元であるといえる。だが二人の情報の内容はこうした表層的なものであり、韓米関係や、ハワイに在住する韓国系アメリカ人等について言及されることはない。

フランス語教科書に見られた、韓国について外国語で考察するための単元は、英語教科書にもいくつも見られる。例えば、ハルマ教科書株式会社の「High School English IIB」ではパーク・ウォン (Park Won) の随筆「Keep Korea Beautiful!」から引用した単元がある。このなかでウォンは、韓国がこれまでの経済成長のなかで、過去の伝統的文化を等閑にしてきたのではないかという反省を述べている。そして、文化的遺物だけでなく、環境 (environment) を次世代に残していかなければならないと表明する。また、海外から韓国を訪れる旅行者は、朝の静けさの地 (the Land of Morning Calm) を求めて来ているのであって、決してニューヨークの東洋版 (Oriental version of New York City) を見に来ているのではない。彼らは、何か異なったもの、古い世界の美しさ、遺蹟、伝統的な建造物を求めているのだと述べる。さらにウォンは、近代的なビルや複雑な道路網は、それ自体の美しさを持ってはいるが、自分はそれらと“beauty”ということばを結びつけて使いたくはないと述べる。つまり韓国の伝統的な美しさこそが、“beauty”に値するのだと考えているのである。韓国の外側から英語で書かれたこの随筆は、韓国の高校生が自国の伝統や文化を見つめ直すための、いわば鏡としての役割が担わされている。

4. 日本語教科書の単元内容との比較

かつて調査した日本語教科書においては、その単元内容は大きく以下の9項目に分類できた。

- (1) 日本文化や日本社会について述べたもの
- (2) 日本語の機能や構造について述べたもの
- (3) 日韓関係について述べたもの
- (4) 教材の文章そのものを日本の文学作品などから引用したもの
- (5) 日本語での手紙の書き方を、実際の手紙文で習得するもの
- (6) 日本の格言などについて述べたもの
- (7) 韓国の文化や社会について解説したもの
- (8) 両国の高校生の交流や生活などについて述べたもの
- (9) いずれにもとくに関係のないもの

これらのうち、中国語、フランス語、英語教科書で、それぞれの言語に置き換えた単元内容を比較検討してみると、いずれにおいても共通に見られたものには(1), (2), (4), (5), (7), (9)などがあつた。さらに4言語の教科書を比較してみると、中国語教科書では他の言語の教科書に比べて(2)や(4)の単元内容が多く、またフランス語教科書では比較的(1)の単元内容が多く、さらに英語教科書の場合ではイギリスともアメリカとも関連しない(9)の単元内容も多いことが認められた。

(5)の手紙文については、すべての言語において各社の教科書に頻出していた。手紙文の多くは、韓国人の高校生が当該言語使用国の高校生等とやりとりをするという設定になっている。このため教科書で学習する高校生たちは、自身と等身大の主人公に合わせて、外国人との交流をシミュレートすることができる。

(7)の韓国の文化や社会について解説するものも、各社各言語の教科書に頻出する単元内容である。先述のように、自国について書かれた内容を外国語で読むことは、客観的な視点に立って自らの文化や社会を見つめ直すための契機になるのである。自国の文化の再確認という問題は、先述の進門出版社『高等学校日本語』の単元「急な別れ」の会話文のなかでも重点的に展開していた。以下にその部分を引用してみる。

秀 姫：文化についても同じことが言えますね。

韓国の文化をヨーロッパの文化と比べても、なにが韓国的なのか、実は、あまりよく分からないんです。

金敏基：「韓国的」と「アジア的」の区別が、はっきりしないんですね。

李昌浩：おもしろいですね。ぼくは、経済について日本の本を読むために、日本語を勉強していたんですけど、もっと大切なことがあったんですね。

韓国の文化をヨーロッパの文化と比べた場合、韓国文化の独自性が分からないという指摘、またアジア文化の一つとしての韓国文化のアイデンティティがわからないという指摘は、韓国の現在の高校生たちの率直な感情を代弁しているといえよう。

中国語や日本語の教科書の写真で紹介される現在の台北や東京の光景は、ソウルの光景とも類似しており、それがどの都市なのかを写真だけで判断するのは難しい。韓国の高中生たちにとっても、写真に写された看板の文字や人々の風俗の微妙な差異などを注意深く観察しなければ、それがソウ

ルなのか、台北駅前なのか、新宿なのかを瞬時に識別するのは困難だろうと思われる。

韓国と台湾と日本では、とくに大都市圏でサブカルチャーが隆盛し、また様々な情報が流入・流出しその商品化が進んでいる。さらに都市が国際化することで、新興する文化の無国籍化が進んでいるともいえる。韓・台・日に共通するこうした現状は、これら3地域の都市のもつ固有の景観を消滅させる。先に引用した単元「Keep Korea Beautiful!」の中で、ウォンは韓国の景観が「ニューヨークの東洋版」となってしまうことを恐れていた。だが韓国や台湾や日本の大都市の景観が向かいつつあるのは、実際にはニューヨークなどとはかなり異なった、「極東の大都市」としての画一的な景観なのである。

日本語や中国語の教科書のなかで、韓国と同じ経済体制を持つ日本や台湾の、ソウルと同じように高度に文明化した状況を紹介することは、韓国の高中生に一定の安心感を与えるものではあるが、他方で韓国の文化との相違点が見えてきにくいために、3地域の文化の独自性が混乱して認識される危険性も持っている。日本語教科書の単元「急な別れ」では、会話文自体でその問題を掘り起こすことで、ともすれば韓国文化のアイデンティティを見失いがちな高校生たちの注意を喚起しているといえよう。

(3)と(8)とは、日本語教科書だけに重点的に使われていた単元内容である。とくに日韓関係や日本語をめぐる問題については、韓国は36年間に及ぶ日本からの植民地支配時代を経験し、また当時強制的に日本語を学習させられ朝鮮語を抑圧されていることから、日本語教科書でも避けて通れないテーマだといえる。

各社の各言語の教科書の単元内で、「なぜその言語を学ぶのか」という問いかけには、中国語、フランス語、英語では見られず、唯一日本語の教科書だけに認められるものであった。前回の調査で見たように、日本語教科書の単元では、韓国語と日本語のように近接する言語どうしであればこそ、相手言語を学習することで母語の特徴がより明確になるのだとの見解にたち、第一外国語の英語の次に日本語を学ぶことの重要性を説いていた。つまり、日本語が他の外国語よりも韓国語に似ているために、日本語の学習が韓国語の再認識にも役立つのだと述べられていたのである。だが、日本語を学習することにこのようなメリットがあるにせよ、日本語学習者の心情には、日本語を習得したいという思いと日本に対する複雑な感情とが、

アンビバレントに共存しているものと考えられる。

1990年に行われた韓国の世論調査においては、「日本が好きですか」という質問に、有効回答者数2,021人中66%の人が「きれい」と答え、わずか5%の人が「好き」と答えている。また「日本」から何を連想するかを尋ねた質問には、33%の人が「植民地統治、歴史的苦痛」をあげたという⁶⁾。こうした国民感情の中で、日本語を履修する韓国の高校生たちは、「なぜ自分は日本語を学ぶのか」という自問を繰り返しているものと思われる。他方、朝鮮日報文化部長呉重錫氏は、韓国の現代の若い世代を分析して「日本の学問と技術、文化を新たに取り入れようとする若い世代は(中略)過去の不幸だった歴史は忘れることなく、日本人から学ぶことがあれば徹底的に学んで自分のものにする」⁷⁾意識を持っていると述べる。また先の進進出版社「高等学校日本語」の単元「急な別れ」の会話文では日本人の幸子に「日本人は、韓国でずいぶんひどいことをしたんでしょう」と尋ねさせ、それに対して韓国の高校生である秀哲に「もちろん歴史的な事実は消えませんが、本当に大切なのはこれからです。昔のいやなことばかり考えて、新しい友情を作ることができないのはもっと残念なことです」と答えさせていた。

このように韓国の高等学校の日本語教育は、生徒たちに、過去の歴史をふまえながらも、韓日間の文化交流を推進し経済協力を緊密化しなければならぬことを納得させ、あるいは異文化理解の足掛かりを与える役割を担っているといえる。日本語教科書は、ある意味で歴史や地理の教科書を補完しているのである。このため日本語教科書の中の韓日関係をめぐる単元内容は、他の外国語科目にはみられないほど充実しているのである。

また(8)の、当該言語使用国の高校生との交流に関わる単元が、日本語教科書のみ認められることについては、近年日本の高等学校で韓国への修学旅行を行うところが増え、また学校間交流なども行われるなど、韓国の高校生が実際に日本の高校生と交流する機会が増えてきたことや、日本の高校教育が韓国の高校教育に類似しているために、フランスや英語圏や中国語圏の高校生よりも、日本の高校生を具体的なイメージで想起しやすいこと等の理由が考えられる。さらに先の(3)のところでも見たように、韓国では高校生同士の交流に、次世代の韓日関係の構築への大きな期待がかけられているとみることができる。

III 結語

公教育のなかで、児童生徒が海外の情報を得て、その具体的なイメージを構築していくことについては、これまでは、とかく地理や歴史の教科書ばかりがクローズアップされてきた。1982年のいわゆる「教科書問題」以降、日韓相互に学校教科書の記述内容を検討する研究会等が開かれているが、それは、基本的に歴史教科書を主たる対象とするものであった。歴史や地理の教科内容では、対象国の史実や現況を理解させることが重視されるため、教科書の記述は直接的なものとなる。しかし地理や歴史の授業では、教授者が十分な補助教材などを使って授業を工夫しないかぎり、その国の人々の具体的な姿は、存外に見えてこないのではないかと思われる。

一方、外国語教科書は、その言語を習得させるという実質的な効果のみならず、その単元内容や教科書に掲載された写真を通じて、その国の事情を理解させることができるという、形式的・潜在的な教育効果を持っている。例えば外国語の教科書では、登場人物がその国を舞台にその国のことばを話し、なんらかの人格を持った人物として描かれるから、生徒たちはそれがたとえ架空の存在であっても、その国と国民に対する生き生きとしたイメージを持つことができる。また生徒は、自身が選択し履修する外国語に対してプライドを持ち、やがてその外国語に対する愛着を持つようになる。そしてそれは当該国に対する親しみを育てることにもつながる。外国語教科書は、このような形式的・潜在的な効果を持つがゆえに、生徒にどのような教育効果をもたらすかという予測が立ちにくい。このため教科書編纂者は、その記述内容に細かな配慮をなさなければならない。

本稿では、このような視点に立って日・中・仏・英4カ国語の教科書を比較した。先に検証したように、フランス語教科書については、若干韓国にかかわる単元があることを除けば、日本の大学の教養課程などで使用されているフランス語教科書⁸⁾の例文と大差はなく、また韓仏関係などに深く入り込むような単元内容はなかった。また英語教科書では、各社の教科書の単元内容が様々な話題に拡散しており、英語教科書としての共通した性格を見いだすことはできなかった。一方、中国語教科書の記述内容には、韓国独得の配慮が見られた。先に見た天安門の写真が修正されていたのも、こうした配慮によるものとみることができ

る。ところで近年、韓国は中華人民共和国との国交正常化にのりだしており、このため台湾と中華人民共和国に対する外交姿勢にも変化が見られるようになってきた。とくに1992年の台湾との国交の断絶は、今後の中国語教科書の編纂方針に、大きな影響を与えて行くものと考えられる。

以上、中・仏・英3言語の教科書を検証したうえで、日本語教科書をふりかえてみると、その記述内容や写真は、中・仏・英の教科書以上に日本理解を助けるものであることがわかる。

1989年の調査で、日本、アメリカ、ソ連、中国、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の5カ国が、サッカーの試合をした場合、あなたはどの国を応援するか？というアンケートに対し、韓国の高校生の回答結果は、1. 北朝鮮、2. 中国、3. アメリカ、4. ソ連、5. 日本の順になったという⁹⁾。韓国の高等学校では第二外国語での日本語履修者が多いとはいえ、対日友好意識は低いのである。このアンケート結果を紹介した大槻健氏は、高校生以上の被験者の対日友好度が低いことから、韓国の歴史教育の影響を指摘している。また高崎宗司氏の研究では、韓国の歴史教育は決して「反日感情」を煽るようなものではなく、史実に忠実な客観的な内容であることが明らかにされている¹⁰⁾。大槻氏と高崎氏の論点を総合すると、客観

的な史実が韓国の高校生の上記のようなアンケート結果をもたらしていることになる。

一方で日本語教科書は、韓国の高校生の、「歴史」教科書による日本理解を補完する役割を担っている。「歴史」で教えられる客観的な史実が高校生たちの「反日感情」を生み出すのであれば、日本語教科書における正確な情報は、逆に高校生たちの対日友好意識を高める可能性を持っているからである。したがって日本語教科書に盛り込まれる内容や情報もまた、「歴史」の教科書と同様に、正確で最新のものでなければならない。

今後、韓国の高校生の正確な日本理解を期し、日韓がより親密な友好関係を築いてゆくためには、韓国の教師たちによる日本語・日本事情に関する情報収集を日本からもバックアップできるシステム作りが必要であろう。むしろ、日本の高校生たちにも、朝鮮半島に対する正確な歴史認識、現状認識を持たせてやる必要がある。このことは前回の拙稿で述べたとおりである。

なお、今回の教科書の収集にあたっては、元文部省教員研修留学生、李 鐘玄氏にご協力いただき、また韓国の教育事情等については、韓国晋州教育大学の河 永純教授、福岡教育大学大学院生 金 大勲氏にご教示いただいた。お礼申し上げます。

註

- 1) 拙稿「韓国の高等学校日本語教科書における日本像に関する研究」『福岡教育大学紀要』第41号 第4分冊、1992年。
- 2) 飯田史也「韓国の高等学校日本語教科書における日本像——1991年度教科書を中心にして——」異文化間教育学会第13回大会、1992年5月14日、於筑波大学。
- 3) 韓国では、高等学校第2種（認定）教科書の執筆指針は、5年ごとに改められ、この指針に基づいて教科書が執筆される。各教科書は教育部の検定に合格後、各高等学校で採用される。また、現在の第二外国語教科書の執筆指針は、第5次教育課程文教部告示第88-7号（1988年3月）に次のように示されている。
 - ① 言語機能を総合的に習得し得る内容にし、初期段階には「聞く・話す」に重点を置きながら、「読む・書く」という能力を養うようにする。
 - ② 言語機能のバランスの取れた運用能力を養うため、会話、読解、作文、語彙、文法などの項目を総合的に指導できるものにする。
 - ③ 該当外国語常用の国民と日常生活、文化、思考などを理解し、国際的な理解と見識を高める内容にする。

（以上、朴 熙泰氏の日本語訳による）

韓国の高等学校では、中学校から始まる英語教育に続いて、第一外国語の英語のほか、第二外国語教科課程としてドイツ語、中国語、フランス語、スペイン語、日本語が教授されている。第二外国語は必須選択科目の一つであり、第二外国語を履修する高等学校生徒は5外国語のうち一つを選択する。現在、人文系高等学校で英語20単位、第二外国語10単位が、実業系高等学校では英語16単位、第二外国語6単位が指定されている。韓国の多くの大学が、第二外国語を入学試験科目として指定しているため、現在、多数の生

徒がいずれかの第二外国語を習得している。なお韓国の現職高等学校教諭たちによれば、5つの外国語のうちどれどれを開講するか、また3年間の高等学校課程のうち、どの段階で第二外国語を教授するかというの、各高等学校の裁量に任されているようである。

第二次世界大戦後の韓国では、1946年まで、4年制中学校で英語が教えられていたが、学校制度が6-6-4制に代わった1946年からは、高級中学(高等学校)で英語とドイツ語またはフランス語が教えられていた。また教育課程が制定されて以降は、1954年から第二外国語としてドイツ語と中国語が教授され、フランス語が1963年から、スペイン語が1970年から、さらに日本語が1973年から教授されることになった。

『日本語教育年鑑1990年版』アルク/凡人社、1990年によると、1988年の韓国の各第二外国語の履修生徒数は、

人文系高校	ドイツ語	(639,849名; 42.2%)
	日本語	(460,110名; 30.3%)
	フランス語	(386,131名; 25.5%)
	中国語	(17,175名; 1.1%)
	スペイン語	(13,907名; 0.9%)
実業系高校	日本語	(483,818名; 79.5%)
	中国語	(78,844名; 13.0%)
	ドイツ語	(24,474名; 4.0%)
	フランス語	(20,022名; 3.3%)
	スペイン語	(1,457名; 0.2%)

となっている。

- 4) 中国の少数民族居住地域などは中国(漢)文化圏とは言えないが、公用語として中国語が使用される。この場合は言語圏が文化圏を包摂しているといえよう。
- 5) これについては、前回の調査で韓国と日本の文化・文明が比較的類似したものであるために、教科書の限られた掲載写真の中で日本的なものを示そうとすると、韓国との差異を際立たせなければならなくなり、より伝統的な和風事物が強調されてしまうのではないかと推論した。
- 6) 『朝日新聞』1990年8月1日。
- 7) 呉重錫「韓国のマスコミにおける日本語」(『日本語教育年鑑1990年版』アルク/凡人社、1990年)、参看。
- 8) 比較検討した日本のフランス語教科書は、次のものである。なお、韓国のフランス語教科書検定年と、ほぼ同時期の出版のものを選んだ。
 - ・山内宏之、加賀山孝子“*Conquête du français*”, 駿河台出版社, 1989年
 - ・Claire Silvy, 鈴木重生“*Destination la France*”, 駿河台出版社, 1989年
 - ・加納 晃他編“*Livre de Lecture*”, 駿河台出版社, 1989年
 - ・朝倉季雄“*Sketches et Exercices structuraux*”, 白水社, 1989年
 - ・Serge Cuenin“*La France Aujourd'hui*”, 朝日出版社, 1988年
 - ・中川伸吾, 原田佳彦“*Trésors des expressions françaises*”, 駿河台出版社, 1988年
 - ・秋山和夫, 根岸純編“*Aristoloche*”, 白水社, 1989年
 - ・浜名優美編“*La France dans toutes ses histoires*”, 駿河台出版社, 1988年
 - ・丸山義博“*Nous savons lire*”, 朝日出版社, 1988年
 - ・山崎 卓, 中村栄子“*Pas à pas*”, 駿河台出版社, 1989年
 - ・饗庭孝男“*Français pour tous*”, 白水社, 1989年
 - ・Thierry Maré, 水野綾子“*Manuel et le Français*”, 白水社, 1989年
 - ・三野博司“*Les Saisons nipponnes et leurs signes*”, 駿河台出版社, 1989年
- 9) 大槻健『韓国教育事情』新日本出版社, 1992年, 参看。
- 10) 高崎宗司『「反日感情」——韓国・朝鮮人と日本人——』, 講談社, 1993年, 参看。